

挨拶

愛知大学人文社会学研究所所長

宇佐美一博

2015年4月に愛知大学人文社会学研究所が設立され5年がたちました。研究所は、社会・心理・教育学部門、歴史・地理学部門、文学部門、言語学部門、新領域創成部門の5つの部門からなり、現在所員62名、客員所員17名、研究員1名を擁しています。学内では人文学と社会学の諸領域に関する基礎研究及び双方にわたる所謂学際域に関する高度な研究を担い、その成果を社会に還元する拠点としての役割を果たすことを目標にしています。この間その成果は、文学論叢、プロジェクト・研究会やシンポジウム・ワークショップ等の報告書という目に見える形となって公表され、知的財産として蓄積され、その成果は広く社会に発信されています。

今回のシンポジウム「ことばの詩 生活の詩 社会の詩―日常の中のポエティクス」は、本学文学部欧米言語文化コースの現代国際英語専攻所属の片岡邦好教授の企画によるものです。従来のことば中心の詩の研究を反省し、生活、社会のいろいろな場面における詩の働きを探ろうとするもので、学外から4人の研究者を招いて幅広いいくつかのテーマについて報告、討論されました。このシンポジウムは、今後、詩が日常の中で持つ意味を解き明かすための基礎的研究になると確信し、ここに報告書として刊行する次第です。

ここで一つ提案があります。それは中国における詩の歴史との比較です。私の専門は中国の古典で、異なった専門のシンポジウムに参加したのは初めてでしたが、このシンポジウムによってこれまで全く気づかなかったことに気づかされ、専門を異にする研究会に参加する意義を痛感しました。

中国における詩の歴史は片岡教授が研究されている分野の詩の歴史とは正反対の方向に発展したのではないかと考えます。中国で一番古い詩は、紀元前6世紀以前のポエティクスである『詩経』です。四言詩で、約300編、歌謡から生まれた畳詠形式で、後に儒教の経典にもなります。紀元前6世紀から5世紀に活躍した孔子の学校では、「子貢曰わく、詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しとは、其れ斯（こ）れを謂うか。子曰わく、賜（子貢）や、始めて与（とも）に詩

を言うべきのみ」(『論語』学而篇)のように、『詩経』が重要な科目として教えられ、詩的パフォーマンスの解明を通して、先生と学生がたえず切磋琢磨していました。

『詩経』には、内容上の分類「風」「雅」「頌」と詩のレトリックの一種である「比」・「賦」・「興」という「詩の六義(りくぎ)」があります。「風」は15の国の民謡、「雅」は宮廷の楽歌、「頌」は宗廟で祖先を祭るときの楽歌です。「比」は比喻による表現法、「賦」は心に感じたことをそのままうたうもの、「興」は植物・動物など自然によせて述べ始める表現法です。まだ文字を書く竹簡や紙は発明されていないので、口誦が中心でした。中国における「詩」の源流、『詩経』はまず「生活の詩」「社会の詩」としてあったといつてよいと思います。さらに当時外交使節が他の国に使いするときには詩での応対が義務づけられていましたので、『詩経』は政治的な意味も持っていました。詩の暗誦は当時の士大夫と呼ばれる官僚には必須の教養でした。

その後時代がたつと竹簡、紙が発明され、詩は文字で書かれることばによる個人の創作を指すようになります。四言詩から五言詩・七言詩の近体詩へと発展し、平仄(ひょうそく)や押韻の緻密な形式も整えられていきました。口誦による生活の詩、社会の詩、政治の詩—日常の中のポエティクス—が時代とともに文字で書かれる個人の創作へと発展していったのです。『詩経』は、言語、身体、事物、環境との協働を通じて湧き出る実践知の宝庫と言えます。この『詩経』及び孔子の学校での詩の教育の実態の分析は、片岡教授の問題提起に少なからず貢献するのではないかと考えます。今後中国の詩の研究者が参加する東西共同シンポジウムが開かれたら、さらに広く人類にとって詩がどのような社会的意味を持つのかについて興味深い成果が得られるものと考えます。いつかこのようなシンポジウムを企画してくださることを最後に切望して挨拶文にしたいと思います。